

東アジア4大学における大学生の生活習慣

Students' Lifestyle of 4 Universities in East Asia.

三上章允^{1,2)}・徐明仿³⁾・Knathi Arum WIDAYATI⁴⁾・劉青佳²⁾
 Akichika MIKAMI, Ming-Fang HSU,
 Kanthi Arum WIDAYATI, and Seika RYU

抄録：東アジア（日本、中国、台湾、インドネシア）の4つの大学で大学生の生活習慣を調査した。

日本のG大学で42.5%、台湾のT大学で約35.9%、インドネシアのB大学で38.3%、中国のS大学で24.4%の学生が朝食を抜いていた。朝食を抜く回数は週4日程度であった。このように、朝食を抜く傾向が調査した東アジアの4つの大学でみられた。日本のG大学の非自宅通学生で朝食を毎日食べている学生が半数以下という結果は特に要注意である。4つの大学とも朝食を抜く学生が相当数いたが、その理由や影響については更なる解析が必要である。

就寝時刻は、原則全寮制の中国のS大学では消灯時刻が決められているため早く、インドネシアのB大学ではイスラム教の日の出前礼拝に起床するため就寝時刻は早かった。一方、日本のG大学と台湾のT大学の学生は平均0時過ぎまで起きている傾向があった。起床時刻は逆に中国のS大学で一番遅くなっていた。このため睡眠時間は中国のS大学で約8時間と長く、日本のG大学、台湾のT大学、インドネシアのB大学で約6時間であった。さらに、中国のS大学では昼休みが長く昼寝をする学生が多かった（48.6%）。中国のS大学では講義中の居眠りが少なく、昼寝は午後の講義への集中を可能にする点で効果があるかもしれない。

キーワード：大学生、食習慣、学習習慣、睡眠習慣、東アジア

はじめに

大学生は自ら進んで学業を修めることが求められる。大学内における学習だけでなく、大学の外での生活も変わる。高校までは親の管理下に置かれていた生活も、その自由度が高まり、寮やアパートで親元から離れて生活するケースも多くなる。大学生は学外での生活を含め、自ら計画を立て実行していくことが求められるが、生活の管理が悪いと健康上の障害や、学習の遅れにつながりかねない。こうした大学生の特徴は、東アジアの国々でも共通するものと予想される。

一方、東アジアの国々では、地理的、文化的に共通の背景を持ちつつも、政治的、社会的、宗教的に様々な相違もある。東アジアの大学生の学生生活を知ることで、日本の学生への指導を考える手掛かりを得ることが期待できる。

本研究では、日本、中国、台湾、インドネシアの4つの大学の大学生の生活習慣を調査し、その共通性と相違を明らかにするとともに、居住環境、通学条件などの背

景因子との関係を解析する。規則正しい生活習慣は身体的健康にとって必要条件であり、ひいては、学習意欲・学業成績の向上にもつながると考えられる。本研究により規則的な生活習慣に寄与する要因を明らかにできれば、教育現場での基礎データとしての寄与も期待できる。また、今後のこれらの地域における健康教育のあり方を検討する基礎資料を得ることも可能であると考えられる。

方法

1. **調査対象**：日本・中部地区の郊外型大学であるG大学学生1135名、中国・上海地区の郊外型大学であるS大学学生311名、台湾・中部地区の郊外型大学であるT大学学生234名、インドネシア・西部ジャワ地区の郊外型大学であるB大学学生253名であった。調査対象とした各大学の学部・学年・男女の人数を表1に示した。なお、各大学の調査対象学生の学部・学年・性別の詳細は末尾の資料2、資料3に示した。

1) 看護リハビリテーション学部理学療法学科 2) 大学院人間福祉学研究所

3) 中台科技大学看護学部 4) ボゴール農科大学数学・自然科学部

表1 各大学毎の調査対象学生数

大学(国)	男子	女子	計
G大学(日)	611	524	1135
T大学(台)	44	190	234
S大学(中)	166	145	311
B大学(イ)	63	190	253
計	884	1049	1933

2. 調査期間：中国のS大学、台湾のT大学は2013年7月～10月、日本のG大学、インドネシアのB大学は2014年6月～9月であった。なお、簡略化のために以降、G大学(日)、T大学(台)、S大学(中)、B大学(イ)と記載する。

3. 調査項目：通学形態、通学時間、居住条件、食習慣、睡眠、運動習慣、嗜好品等であった。なお、アンケート本文については、末尾の資料1に示した

4. 倫理的配慮：アンケートの配布前に研究の趣旨を説明し、アンケートの提出をもって同意とみなす旨説明した。なお、本研究は中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究倫理委員会の承認(承認番号：E13-0005、E13-0016、E14-0013)を得て実施した。

結果および考察

1. 通学形態・通学時間

調査対象の各大学の自宅通学生の比率を図1に示した。自宅通学生の比率はG大学(日)で圧倒的に高く、61.2%であった。T大学(台)は日本の約半分の34.5%、B大学(イ)は10.3%、S大学(中)は3.5%であった。S大学(中)で自宅通学率が極めて低いのは、中国の大学では特殊な例外を除き原則として全寮制のためである。図1Bに示すように中国では非自宅通学生はすべて寮生活であった。一方、自宅通学と非自宅通学がそれぞれ相当数いるという点ではG大学(日)とT大学(台)は類似しており、自宅通学の選択が費用面での負担の軽減を考慮した結果の可能性が考えられる。

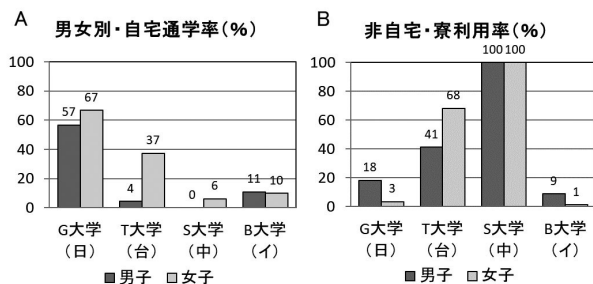


図1 通学形態 A：男女別の自宅通学率、B：非自宅通学生中の寮利用率、縦軸の単位は%

日本における自宅通学率については、独立行政法人日本学生支援機構(JASSO)の全国調査における私立大学の自宅通学比率の最新値64.7%(2016年)、本調査と同じ2014年の同機構の調査結果63.3%とほぼ同等であった²⁾。私立大学における自宅通学の比率は2000年の55.7%から徐々に上昇し続けており^{2,5)}、次に述べる通学時間の延長の要因ともなっている。自宅通学者の上昇は、大学生をかかえる家庭の経済状態の悪化を反映している可能性が考えられる。

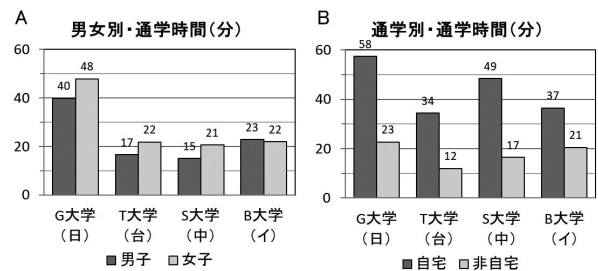


図2 通学時間、A：男女別、B：自宅・非自宅通学別、縦軸の単位は分

各大学の学生の通学時間の平均は、G大学(日)が43分、T大学(台)が21分、S大学(中)が18分、B大学(イ)が21分とG大学(日)の通学時間は他の3大学の約2倍であった。男女別および自宅・非自宅別の通学時間を図2に示した。自宅・非自宅別(B)では、各国とも自宅通学者の通学時間が長かった。男女別(A)では女子の方が通学時間が長い傾向にあったが、これは女子の方が自宅通学者の多いことを反映したものである。寮生活との関連ではT大学(台)で非自宅通学学生の寮生活と下宿・アパートの比率が50%前後であり、両者を比較した、寮生活の通学時間の平均通学時間が12.9分、下宿・アパート生活の通学時間が10.8分と大きな差はなかった。一方、G大学(日)では寮生活の通学時間は16.0分、下宿・アパートの通学時間は25.5分と、B大学(イ)では寮生活の通学時間は11.0分、下宿・アパートの通学時間は20.0分と、この2校では下宿・アパート通学生で通学時間が長かった。

日本学生支援機構調査結果の全国調査では、通学時間の平均値61.4分であった。G大学(日)の通学時間(43分)は全国平均よりも短かった²⁾。一方、T大学(台)、S大学(中)、およびB大学(イ)は通学時間が日本のG大学の半分程度であった。G大学では、自宅通学生の通学時間が57分に対し、非自宅通学生の通学時間は20分であった。一般に自宅通学では大学からの距離が長くなる傾向にある。他の3校と比較して日本のG大学の通学時間が長いのは自宅通学生が多いことが要因のひとつと考えられる。さらに、東京圏、京阪圏などの大都市では大学までの距離が遠く通学時間が長くなる傾向にある。日本学生支援機構調査結果では、東京圏で71.9分、京阪

圏で71.1分と報告している²⁾。長い通学時間が学習の効率を下けている可能性も考えられる。

2. 食習慣

朝食を毎日食べている学生の比率（以下、朝食摂取率と記載）は、G大学（日）57.5%、T大学（台）64.1%、B大学（イ）61.7%と約6割であったのに比較し、S大学（中）では75.6%とやや高かった。逆に、朝食を抜く学生の比率はG大学（日）で42.5%、T大学（台）で35.9%、B大学（イ）で38.3%、S大学（中）で24.4%に達した。男女別と自宅・非自宅別の朝食摂取率を図3に示した。朝食摂取率は、自宅通学者で高く、非自宅通学者で低く、この傾向は特に日本で著しかった。男女比較では男子学生で低い傾向にあったが、これは男子学生に非自宅通学者が多いことを反映したと思われる。朝食を抜く学生が週に何回抜いているかについてはG大学（日）4.7、B大学（イ）3.9、S大学（中）3.8、T大学（台）3.6とG大学（日）の学生が一番高い頻度で朝食を抜いていた。

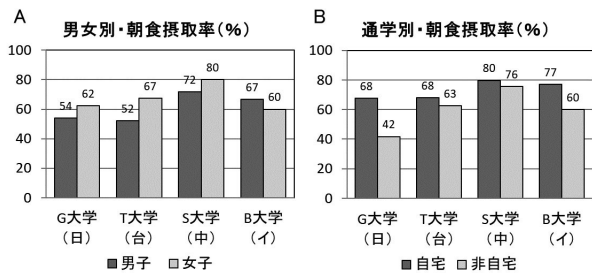


図3 朝食摂取率、A：男女別、B：自宅・非自宅通学別、縦軸の単位は%

このように、朝食を抜く学生の存在は、調査した4つの大学に共通していた。G大学（日）の過去の調査では2011年に34.7%⁵⁾、2013年に38.3%⁶⁾、2014年に42.5%であったので徐々に増加傾向にある。朝食摂取率についての日本国内の他の調査では、農林水産省が2016年に北陸4県の大学で行った調査で59.0%⁴⁾、愛知県が2018年に郊外5都市の大学で行った調査で62.4%¹⁾、名古屋市が2013年に市内の4大学で行った調査で55.5%³⁾などの報告があり、どの調査でも4割前後の大学生が週に何度か朝食を抜いている。今回の調査では、このように朝食を抜く傾向が日本だけの特徴ではないことが分かった。特にG大学（日）では非自宅通学生で朝食を毎日食べている学生が半数以下の41.8%という結果は要注意である。

昼食を毎日食べる学生の比率（昼食接種率）を図4に、夕食を毎日食べる学生の比率（夕食摂取率）を図5に示した。昼食摂取率、夕食摂取率ともに朝食摂取率に比べて高い傾向にあったが、昼食摂取率はT大学（台）の女子学生で、夕食摂取率はS大学（中）の男子学生とB大学（イ）の女子学生で低い傾向にあった。T大学（台）の女子学生で昼食を抜く理由については、ダイエットを挙げた学生が多かった。

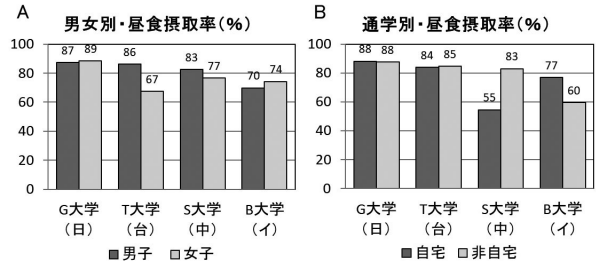


図4 昼食摂取率、A：男女別、B：自宅通学・非自宅通学別、縦軸の単位は%

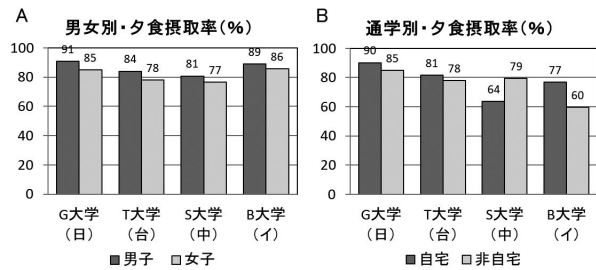


図5 夕食摂取率、A：男女別、B：自宅・非自宅通学別、縦軸の単位は%

3. 睡眠習慣

就寝時刻の平均値は、T大学（台）0時42分、G大学（日）で0時24分と0時過ぎまで起きていたのに対し、S大学（中）とB大学（イ）は、それぞれ23時18分と22時48分と就寝時刻が早かった。男女別の就寝時刻を図6Aに示した。男女で余り差はなかった。自宅・非自宅の違いもわずかであった。

起床時刻の平均値は、S大学（中）7時24分、G大学（日）7時0分、T大学（台）6時42分と7時前後であったのに対し、B大学（イ）は5時6分と早かった。インドネシアの学生は大部分がイスラム教徒で夜明け前に礼拝をする習慣があるためと考えられる。男女別の起床時刻を図6Bに示した。男女で余り差はなかった。自宅・非自宅の違いもわずかであった。

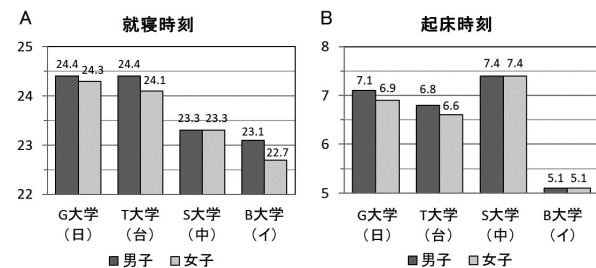


図6 男女別の就寝時刻（A）、および、起床時刻（B）、縦軸の単位は時刻（但し、Aの25時は夜中の1時）

睡眠時間の平均値は、G大学(日)6時間36分、T大学(台)6時間6分、B大学(イ)6時間18分と6時間前後であったが、S大学(中)は8時間12分と長かった。男女別および自宅・非自宅別の睡眠時間を図7に示した。睡眠時間は女子学生で長く、非自宅通学生で長い傾向にあった。

G大学(日)、T大学(台)、S大学(中)の3大学では昼寝の習慣を質問した。S大学(中)が45.8%と高く、T大学(台)31.8%、G大学(日)29.6%であった。

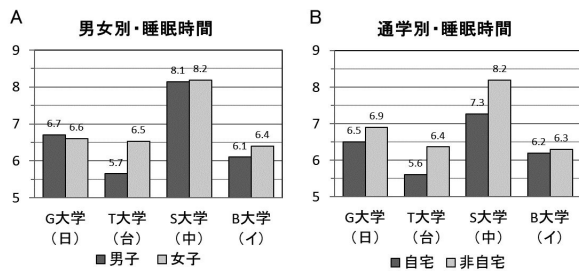


図7 睡眠時間、A: 男女別、B: 自宅・非自宅通学別、縦軸の単位は時間

睡眠習慣はG大学(日)とT大学(台)は類似しており、0時過ぎまで起きていて、朝は比較的ゆっくりしていた。B大学(イ)では夜明け前の礼拝を行うため朝が早く、それに合わせて夜は早めに就寝していた。中国の大学は全寮制のところが多く、調査対象のS大学も大学教員の子弟など特殊な例外を除き全寮制である。寮では集団生活で消灯時間もあるため就寝時刻は比較的早かった。一方、起床時刻は4大学の中で一番遅かった。睡眠時間は日本、台湾、インドネシアの3大学で6時間前後であったが、中国のS大学では8時間を越えていた。

中国ではさらに幼稚園・小学校の時期から昼寝の習慣があり、大学でも昼休みには寮にもどって昼寝をするようである。実際、中国では全体の48.6%の学生が昼寝をすると回答した。また、中国では講義中の居眠りが少なかった。昼寝をすることにより午後の講義への集中力も回復できて良い効果が期待できるかもしれない。大学に入学してから突然に昼寝を推奨しても難しいことが予測されるので、昼寝の習慣は幼稚園・小学校の時期から考慮すべきであろう。

4. 学習習慣

大学の講義に100%出席している学生の比率はB大学(イ)96.8、T大学(台)95.0、S大学(中)93.2、G大学(日)90.9といずれも9割を越えていたが、G大学(日)でやや低かった。午前の最初の講義(1限の講義)の欠席経験については、G大学(日)57.5%、T大学(台)34.5%、S大学(中)31.5%、B大学(イ)17.0%とG大学(日)が高く、B大学(イ)で低かった。男女別と

自宅・非自宅別の1限欠席経験率を図8に示した。1限の欠席は各国とも男子学生に多く、G大学(日)、S大学(中)、T大学(台)で自宅学生に多い傾向にあった。

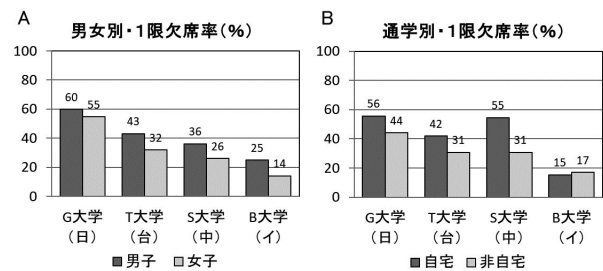


図8 1限を欠席する学生の比率、A: 男女別、B: 自宅・非自宅通学別、縦軸の単位は%

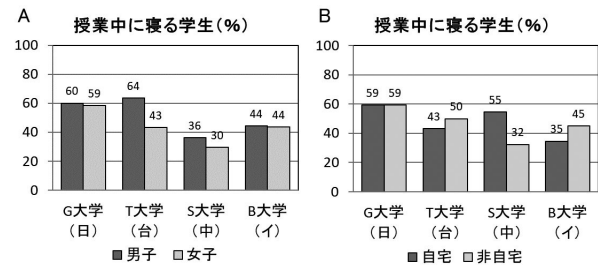


図9 授業中に寝る学生の比率、A: 男女別、B: 自宅・非自宅通学別、縦軸の単位は%

講義中の居眠りについては、G大学(日)59.3%、T大学(台)47.4%、B大学(イ)43.9%、S大学(中)33.1%、とS大学(中)で低い比率であった。男女別、自宅・非自宅別の講義中の居眠りの比率を図9に示した。居眠りはG大学(日)、T大学(台)、S大学(中)で男子学生に多く、T大学(台)とB大学(イ)で非自宅学生に多い傾向にあった。

講義中の携帯電話・スマートフォンの使用経験は、各国とも6割を越えており、B大学(イ)75.9%、S大学(中)69.8%、G大学(日)69.4%、T大学(台)66.8%であった。

1週間の復習時間はB大学(イ)11.3時間、G大学(日)3.9時間、S大学(中)1.9時間、T大学(台)1.6時間とB大学(イ)で長かった。

5. 課外活動

大学内のサークル活動は、G大学(日)62.7%、T大学(台)60.3%、B大学(イ)53.0%と6割前後であったが、S大学(中)は28.9%と低かった。男女別および自宅・非自宅別のサークル活動を図10に示した。T大学(台)とB大学(イ)では非自宅通学者でサークル活動参加者が多かった。

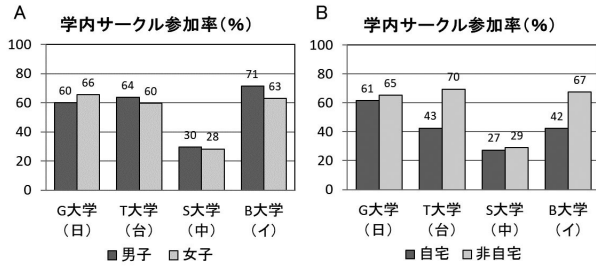


図10 大学内のサークル活動参加率
A：男女別、B：自宅・非自宅通学別、縦軸の単位は%

6. 飲酒と喫煙

週に1回以上の飲酒習慣のある学生の比率を飲酒率とすると、G大学(日)13.7%、T大学(台)7.8%、S大学(中)4.1%、B大学(イ)4.0%で、G大学(日)の飲酒率が高かった。男女別および自宅・非自宅別の飲酒率を図11に示した。飲酒率は各大学とも男子学生で高く、T大学(台)では非自宅通学学生で、S大学(中)では自宅通学学生で高い傾向にあった。

喫煙率については、S大学(中)が20.8%と圧倒的に高く、次いでT大学(台)9.3%、G大学(日)7.8%、B大学(イ)5.1%の順であった。男女別および自宅・非自宅別の喫煙率を図12に示した。各大学とも男子学生に多く、また、4大学とも非自宅通学学生に多かった。

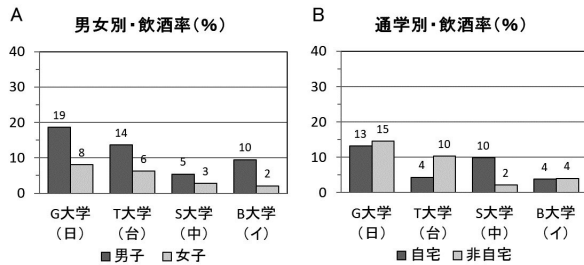


図11 飲酒率、A：男女別、B：自宅・非自宅通学別、縦軸の単位は%

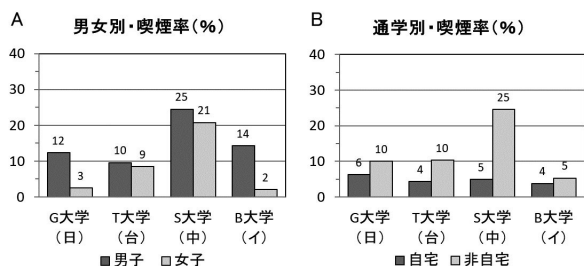


図12 喫煙率、A：男女別、B：自宅・非自宅通学別、縦軸の単位は%

表2 朝食を毎日摂取する学生 (A群) と毎日摂取しない学生 (B群) の比較

	G大学(日)		T大学(台)		S大学(中)		B大学(イ)	
	A群	B群	A群	B群	A群	B群	A群	B群
年齢	19.7	20.1	20.8	20.5	20.8	22.1	19.8	19.9
昼食	94.8	88.5	88.0	78.0	83.8	76.3	72.4	74.5
夕食	93.3	84.6	83.3	72.0	82.6	67.1	87.2	83.7
就寝	12.5	12.7	12.0	12.5	11.2	11.5	10.0	10.2
起床	6.4	7.0	6.6	6.7	7.4	7.7	4.4	5.2
睡眠	5.9	6.3	6.6	6.3	8.2	8.2	6.0	6.1
満足	43.3	33.7	40.0	28.0	34.5	30.3	-	-
出席	92.5	88.1	95.9	93.3	92.6	89.5	96.3	97.5
1限	23.6	49.7	28.0	46.3	28.5	40.8	17.3	16.3
居眠	74.1	80.6	40.7	59.8	27.2	51.3	43.6	43.9
携帯	64.8	76.7	64.0	72.0	67.2	77.6	77.6	72.4
飲酒	8.3	16.9	6.0	11.0	2.1	10.5	4.5	3.1
喫煙	5.7	15.7	0.7	3.7	17.4	18.4	3.8	8.2
GPA	-	-	-	-	-	-	3.21	3.10

表中の単位について：年齢は歳、昼食、夕食は摂取率(%)、就寝、起床は時刻、睡眠時間は時間、睡眠満足度、集積率、1限欠席経験、居眠、携帯使用経験、飲酒、喫煙は%

7. 朝食摂取の習慣による他の生活習慣の比較

朝食を毎日摂取している学生をA群、毎日摂取していない学生をB群として生活習慣を比較した。表2に示したように、朝食を抜く学生と毎日食べている学生を比較すると、G大学(日)、T大学(台)、S大学(中)では、朝食を抜く学生は昼食や夕食も抜く頻度が高く、睡眠満足度が低く、1限欠席率が高く、講義中の居眠りが多かった。また、朝食を抜く学生は喫煙率も高かった。これらの特徴は、朝食を抜くことが単に食習慣に留まらず不規則な日常生活と関連しており、学習にまでその影響が及んでいることを示唆した。言い方を換えれば、日常生活の乱れが結果として朝食を抜くことにつながっている可能性も考えられた。

一方、B大学(イ)では、朝食を抜く学生の学習への影響は見られなかった。インドネシアの学生のほとんどは敬虔なイスラム教徒であり、ラマダン(イスラム暦の絶食月)の時期には1カ月の間絶食する習慣がある。食事を抜くことが必ずしも生活習慣の乱れにつながっていない可能性が考えられた。B大学(イ)では同時にGPAも調べたが、朝食を抜く学生のGPAは若干低かった。

結論

今回の調査は東アジアの4つの大学の学生の生活習慣を調査したものである。それぞれの大学のある国の政治・経済・教育環境などの違いの他にそれぞれの大学が設置されている地域や環境の違い、大学の規模、学部、学年、運営方針などの違いも考慮すると、必ずしも直接比較で

きる条件ではない。しかしながら、これらの国をカバーする大規模な調査が難しく、それぞれの国内調査も実施されていない現状では、このような個別的な調査結果も有益であり、参考になる事実を見出すことが可能なはずである。今回の調査では以下の点が明らかになった。

1. 食事習慣については、若干の差はあったものの、4大学とも相当数の学生が週に何回か朝食を抜いていた。朝食習慣については4カ国共通の課題として取り組みが必要であろう。
2. G大学(日)、T大学(台)、S大宅(中)の3つの大学では、朝食を抜く学生は昼食や夕食を抜く頻度が高く、睡眠満足度が低く、1限欠席率が高く、講義中の居眠りが多かった。これらの特徴は朝食を抜くことが不規則な生活と関連しており、学習にまでその影響が及んでいることを示唆した。この結果は、大学生活により時間の自己管理が必要になったものの、うまく自己管理できず不規則な生活となり、その結果の一つとして朝食が摂取できていない可能性を示唆するものでもあり、しかもその傾向は、おそらく日本だけの傾向ではないと言えそうである。
3. 睡眠時間はG大学(日)、T大学(台)、B大宅(イ)の3つの大学で約6時間と大きな差はなかった。一方、S大学(中)の学生は約8時間だった。また、中国では昼寝の習慣があった。昼寝は午後の講義への集中力を高める効果が期待できる可能性がある。
4. 飲酒と喫煙については、S大学(中)で高かった。G大学(日)はキャンパス内では禁煙と決められているが、男子学生の約1割が喫煙していた。今後禁煙教育の徹底が必要と思われる。

参考文献

- 1 愛知県、「平成30年度 大学生の食生活等生活習慣調査結果」、2018年版
- 2 独立行政法人・日本学生支援機構(JASSO)、「学生生活調査」、2000年度版、2002年度版、2004年度版、2006年度版、2008年度版、2010年度版、2012年度版、2014年度版、2016年度版
- 3 名古屋市、「若者(大学生)の朝食摂取状況調査」、2013年度版
- 4 農林水産省、「平成28年 大学生を対象として食育にかかわるアンケート調査結果報告」、2016年版
- 5 三上章允、小川大智、木島正弘、水野冴香、渡邊将之、関藤紘和、中村知香、美濃和将基、中部地区郊外型私立大学学生の生活様式調査、中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要、第15号、105-110、2014
- 6 三上章允、劉青佳、中部学院大学学生の生活習慣の実態調査—2013年度調査報告—、総合研究センター研究報告、2014年版、1-9、2014

資料1：調査アンケート（抜粋）

基本属性：学部、学科、学年、年齢、性別

A. 住居、通学

- 現在の住居は？（自宅、寮、アパート・下宿、その他（ ））
- 通学手段は？（スクールバス、車、その他）
- 通学に要するおおよその時間（片道）（ ）分

B. 食習慣

- 毎日、朝食を食べていますか？
- 週に1回以上朝食を抜きますか？
週に何回朝食を抜きますか？（ ）回
朝食を抜く理由は何ですか？（ ）
- 毎日、昼食を食べていますか？
- 週に1回以上昼食を抜きますか？
週に何回昼食を抜きますか？（ ）回
昼食を抜く理由は何ですか？（ ）
- 毎日、夕食を食べていますか？
- 週に1回以上夕食を抜きますか？
週に何回夕食を抜きますか？（ ）回
夕食を抜く理由は何ですか？（ ）

C. 睡眠習慣

- 何時に寝ますか？（ ）時
- 何時に起きますか？（ ）時
- 睡眠時間は十分とれていますか？
- 朝起きるのがつらいですか？
- 昼寝の習慣がありますか？
- 昼寝をすると午後の講義に集中できますか？

D. 勉強習慣

- 予習・復讐の時間は？ 週（ ）時間
- 試験の準備はいつ始まりますか？（ ）日前
- 1限の講義の出席率は？（ ）%
- 講義中寝ることがありますか？
- 講義中に携帯電話・スマホを使うことがありますか？

E. 課外活動

- 学内の運動サークルに参加？ 週（ ）時間
- 学内の文化サークルに参加？ 週（ ）時間
- 学外の運動サークルに参加？ 週（ ）時間
- 学外の文化サークルに参加？ 週（ ）時間

F. アルバイト

- アルバイトをしている？ 週（ ）時間
- アルバイトは勉強よりも楽しい？
- アルバイトは勉強の妨げになる？
- 夜遅いので朝がつらい？

G. 自宅、下宿・アパート、寮での時間の過ごし方

- 勉強？ 1日（ ）時間
- テレビ？ 1日（ ）時間
- PC、スマホ？ 1日（ ）時間

H. 酒、タバコ

- 週に1回以上飲酒？
- タバコを吸う？ 1日（ ）本

資料2：G大学(日)の調査対象学生の所属学部・学年および性別

学部	性別	1年	2年	3年	4年	小計
人間福祉	男子	40	58	64	49	211
	女子	37	42	41	34	154
	小計	77	100	105	83	365
子ども	男子	26	16	11	13	66
	女子	48	32	39	49	168
	小計	74	48	50	62	234
看護リハ	男子	70	37	42	36	185
	女子	99	20	19	13	151
	小計	169	57	61	49	336
経営	男子	43	38	39	28	148
	女子	14	16	14	8	52
	小計	57	54	53	36	200
総計		377	259	269	230	1135

資料3：T大学(台)、S大学(中)、B大学(イ)の調査対象学生の所属学部・学年および性別

学部	性別	1年	2年	3年	4年	小計
T大学 看護学部 (台湾)	男子	20	8	14	2	44
	女子	79	49	50	10	190
	小計	99	57	66	12	234
S大学 文学部 (中国)	男子	54	40	40	32	166
	女子	42	46	40	17	145
	小計	96	86	80	49	311
B大学 理学部 (インドネシア)	男子	1	21	18	23	63
	女子	0	64	63	63	190
	小計	1	85	81	86	253